Osaka University Knowledge Archive

Title	性差の科学への挑戦
Author(s)	白岩, 優姫
Citation	年報人間科学. 2007, 28, p. 135-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9022
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

◇書　評◇

性差の科学への挑戦

Anne Fausto-Sterling
Sexing the Body: Gender Politics and the Construction of Sexuality

Basic Books, 2000

白岩優姫

二〇〇〇年に日本語訳が刊行された、アラン・ピーズ、バーバラ・ピーズらによる『話を聞かない男、地図が読めない女』（=1998, *Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps.*）の流行は、まだ記憶に新しい。男女の脳やホルモンの違いから、男女の行動や役割の違いを説明した本だ。この本の発売を皮切りに日本では「脳の性差の科学」が話題になり、それに関連した本が次々と出版された。「男脳」「女脳」という言葉も流行した。しかし、それらの本が提示する「科学の知」は疑いようのない事実なのだろうか。本書の著者、アン・ファウストスターリングは、そうではない、という。我々の身体がおかれている社会的文脈を理解すれば、これらの科学の知が構築されるからくりが見えてくる。そのダイナミックな試みが本書、*Sexing the body* を貫くテーマである。

本書の著者、アン・ファウストスターリングは生物学者であり、科学歴史学者であり、そしてフェミニストである。現在、アメリカのブラウン大学の教授であり、生物学と女性学を教えている。過去の著作には、Myths of Gender（池上千寿子・根岸悦子訳 1985＝1990『ジェンダーの神話』工作舎）がある。本書は、フェミニスト科学への大きな貢献が評価され、アメリカ社会学会の科学・知・技術部門から二〇〇〇年にR・K・マートン賞、女性心理学会からは二〇〇一年に特別出版賞など、数々の賞を受賞している。さらに、アメリカ図書館連盟からは、二〇〇〇年の最優秀学術本の1つに抜擢されている。

まずは本書の全体像を紹介しておきたい。本書は序章を除いて九章に分けられており、それぞれの章で様々な事例が分析されている。しかし全体を通して一貫して焦点が当てられているのは、いかに科学の知の生産が、特定の歴史や特定の人々の習慣、特定の言語、政治、そして文化に影響され、それらと深く結びついているのか、ということである。本書の分析は身体の外部、外性器の科学から始まる。そして徐々に身体の内部、例えば脳、生殖腺、性ホルモン、遺伝子などの科学が分析されていく。以下では各章の目次と議論の簡単な紹介をしていきたい。

第一章「二元論と闘う」ではまず、従来なされてきた性やセクシュアリティの議論を歴史的に追う。

続いて第二章「どちらの性が支配的か」、第三章「ジェンダーと外性器――現代のインターセクシュアルの利用と虐待」、第四章「たった二つの性だけでよいのか?」では、医学が行うインターセクシュアルの幼児の外科的「矯正」の歴史的概観とその分析を述べている。世の中には性のカテゴリーが女・男の二種類しかない、という医学の前提のなかでは、インターセクシュアルで産まれた幼児は「異常」である。現代において、インターセクシュアルの子どもの誕生は医学的な異常だと見なされ、外科的「矯正」が行われている。しかし実際、このようなインターセクシュアルを異常だとする考えは、科学的な知よりも文化的な知によってもたらされている、というのがファウストスターリングの主張である。古代ギリシアやローマでは、インターセクシュアルの誕生が文化的に異常ではなく自然なことであるとみなされていた証拠が、彫刻や神話などに残っているのである。

続いて第五章「性化する脳――いかに生物学者たちは違いを作り出すのか?」でファウストスターリングは脳梁と呼ばれる脳の一部から、男女の違いを立証する科学の試みの詳細な記述を用意する。脳梁とは左右の大脳半球をつなぐ神経線維の束で、視覚情報や言語情報の処理に関係があると言われている。大脳全体との比率でみると女性のほうがそれが大きいために、男女には認知機能に大きな差がある、というのが科学者達の主張である。しかしこの試みをよく調べてみると、驚くべき数の手法的な問題が明らかになる。例えば研究者が用いた実験測定器具は自分の仮説、つまり男女の違いを証明するために都合の良い目盛りがついていた。また、そのための都合の良いデータのみを引用した論理構成にもなっていた。そのため、多くのデータは見てみぬふりをされている。たとえば、実は脳梁の絶対値は男性の方が大きいが、科学者達はこれについての言及はしない。ファウストスターリングは、これらの脳の性差に関する研究の結論は決定的ではなく、有力な文化的想定によって形作られていることにもっと敏感にならねばならない、と主張する。彼女は、もしも我々がもっと個々の多様性や、脳が社会システムの一部として進化する過程に焦点を当てれば、これらの研究は実り豊かなものになるであろう、と述べる。

第六章「性腺、ホルモン、ジェンダー化学」、第七章「性ホルモ

ンは本当に存在するのか？」、第八章「ネズミの神話」では、「性ホルモン」概念の歴史と、どのようにしてこの概念が性の研究に取り込まれ、利用されていったのかが追跡されている。一九四〇年までに科学者達は意図的に採取したある特定のホルモンを区別し、量や効果を測る基準を設け、それらを「性ホルモン」と名づけた。新しいホルモンを扱う科学—内分泌学—は大いに流行し、人間のセクシュアリティの議論の構築に大きな影響をもたらすようになった。この研究が発展するにつれ我々が「性ホルモン」と呼んでいるものは実は、身体の中で複合的な役割を担っており、脳、肝臓、胆嚢、腎臓、血球、循環系、代謝、筋運動を含む身体の多くの分野に影響しているということがわかった。しかし、このホルモンが「性ホルモン」と名づけられていることにより、上記のような性には直接関係のない組織までもが、あたかも性に関係のある組織かのように錯覚されてしまう。つまり身体のあらゆる場所が「性化」されてしまうのだ。そしてそれはあたかも我々の身体が性により支配されていて、性は人間の存在の核心なのである、という思想を導く。これが本書のタイトルであるSexing the body——性化する身体——という現象なのである。ファウストスターリングは性ホルモンという言葉を、性のイデオロギーが介入しないステロイドホルモン、と呼びかえるように提案している。

最終章である第九章「ジェンダーシステム——人間のセクシュアリティの理論へ向けて」は、これまでの議論を踏まえ、科学、特に性の科学についての探求のあり方を模索する。以上が本書の目次と構成である。

ここで、著者であるファウストスターリングの研究の姿勢の例えとして、「メビウスの輪」というものが挙げられていたので紹介しておきたい。メビウスの輪とは、長方形の帯を一ひねりして両端を合わせるとできる輪のことである。面の一方を指でたどっていくと、一度も指を離すことなく、表面と裏面全てをなぞることができる。ファウストスターリングが本書で扱っている研究は、まさにメビウスの輪をたどるように進行してゆく。身体の内部（脳やホルモンなど）で起こっていることを探求すると外部、つまり身体が置かれている環境で起こっていることへの探求へと必然的に繋がり、それはまた身体の内部への研究へと進んでゆく。一度も輪から離れることなく、研究は身体の内部、そして外部へと駆け巡り進行する。そして、この態度こそが科学に必要な態度である、とファウストスターリングは述べるのだ。身体の内部、例えば脳やホルモンだけを扱った研究結果だけで、我々の性について何かを語ることは出来ないし、身体の外部、つまり環境だけを扱った研究結果だけでも、我々の性について何かを語ることは出来ないのである。

しかし現在の日本では、身体の内部の研究だけで我々の性を規定してしまう、というようなことが平然と行われている。その一つが、「ジェンダーフリーバッシング」や「バックラッシュ」と呼ばれる現象である。この現象は男女の性役割、性的指向に関して多様なあ

り方を肯定していこう、という考え方を否定し、伝統的とされる男女のありかたを強化しようとする思想が元になっている。そして、このジェンダーフリーバッシングの正当性を保つために持ち出される論拠がしばしば、人間の脳や性ホルモンなど身体内部の「生理的宿命」なのである。例えば、バックラッシュ派の代表的存在である西尾幹二、八木秀次の著書、『新・国民の油断』で西尾幹二はこう述べる。「男女のあいだには優劣の差なんかない。ただ女性は女性という生理的宿命を背負っており、そこを起点にして考えなくてはならない。男性もまた、男性以外は持っていない生理的宿命を背負って生きているのです。」（西尾・八木 二〇〇五: 三五五）このようにバッシングをする側は、男女には生まれつきの「生理的宿命」があるとし、このために男女の多様な生き方を認める社会の構築は不可能だと主張する。しかし彼らの依拠する男女の生理的宿命に関する研究（脳や性ホルモンの研究）は、人間の身体をただ物質としての観点から見ただけの、つまり、ファウストスターリングの言葉を借りれば、メビウスの輪の「内側だけ」を研究した結果であるのだ。ただこのような「内側だけ」を扱った研究だけでは、我々の性について、何ひとつ明らかにすることは出来ない。我々の性について何か確かなことを言うためには、身体の内側を研究したら、必ず探求は外側、つまりその脳がおかれている環境へと向かわねばならないのだ。それがまさしく、ファウストスターリングが言う科学的な態度である。バッシングをする側が提示する根拠はしばしば、科学的で説得力があると思われがちであるが、実は非常に狭い視野しか持たない、最も非科学的な思考の典型なのである。彼らの依拠する論拠は、実は我々の性について何も証明してはいないのだ。

それでは、研究者が研究で上手く人間の性を体現するためには、具体的にどのようなことに留意すれば良いのだろうか。ファウストスターリングは、ここで研究者が肝に銘じておくべき三つの基本的原則を提案する。第一の原則は、自然か、構築かは目に見えないということだ。よって自然か、構築かの論争は不毛である。第二の原則は、生物は人であれ何であれ、受精から死までの動的な過程である、ということだ。第三の原則は、たったひとつの学問、または臨床研究だけでは、人間の性を理解することはできない、ということである。ファウストスターリングが提案するこれらの原則は、性を研究する研究者に限らず、幅広く「人」を研究する研究者全員に有益なのではなかろうか。

これまで繰り返し述べてきたように本書は、科学の知の生産への文化的政治的影響を、科学的に証明している。ファウストスターリングの視点では、科学的な「真実」は普遍的なものではなく、いつも特定の歴史的社会的文脈で構築されている。それはつまり、彼女が本書で科学的に証明したことでさえ、普遍的な真実ではないということだ。ファウストスターリングはそれを自覚し、自分の政治的立場――フェミニストとしての立場――を決して隠そうとはしない。本書は科学の本であると同時に、フェミニズムの本でもあるのだ。

このファウストスターリングの潔さ、そして誠実さは、一九八五年の著書 *Myths of Gender* から本書、*Sexing the body* にまで一貫している。

序章でファウストスターリングは、本書をこう表した。*Sexing the body* は一般の読者が近づきやすい物語調の本と、アカデミックの世界の議論を刺激する学際的な本、この二冊を一冊にまとめたものである、と。ファウストスターリングがそう言うように、本書はいたるところで図表、写真、絵、そして漫画がふんだんに使われ、ユーモアのセンスに溢れており、誰でも読みやすいようになっている。その一方で、本書の三分の一以上を占める膨大な脚注が表しているように、議論は緻密で大いに専門的である。本書は誰にでも扉を開き、本書の門をくぐった人は誰でも、ファウストスターリングの誠実で刺激的な研究に、エンパワーメントされるはずだ。

ファウストスターリングの研究はもちろん本書で終わりではない。科学は、メビウスの輪の裏表を駆け巡るように、永遠に続く誠実な探求の賜物なのだから。

参考文献

Fausto-Sterling, Anne, 1985, *Myths of Gender*, New York: Basic Books Inc.（＝池上千寿子・根岸悦子編、1990『ジェンダーの神話』工作舎。）
西尾幹二・八木秀次、2005『新・国民の油断』PHP 研究所
Pease, Allan and Pease, Barbara, 1998, *Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps*, London: Darley Anderson Literary TV&Film Agency.（＝藤井留美訳 2000『話を聞かない男、地図が読めない女』主婦の友社）